

スサノヲ論

第一章 誕生から高天原へ

第一節 泣く神性

『古事記』に見える異界「海原」「根の国」「妣の国」「黄泉の国」は互いに関連しているように見える。まず、スサノヲの台詞「僕は、妣が国根之堅洲国に罷らむと欲ふが故に、哭く」からもわかるように、「妣の国」と「根の国」は同一視されている。また大祝祝詞で、海原を経由して根の国へ罪がはらいやわられる所からして、「海原」と「根の国」はつながっている。さらに、スサノヲの母はイザナミと考えられるので、イザナミのいる「黄泉の国」と「妣の国」も同一という事になる。

「妣の国」の語は『古事記』にもう一度出てくる。神武天皇の兄

小林綾子

(稲水命)は、妣の国として海原に入る、と上巻の最後に出てくる。稲水命の母は玉依毘売である。玉依毘売は海神の女である。この箇所からもわかるように、海原と妣の国は無関係ではないようだ。

スサノヲは、海原の統治を依頼されたり、泣くことによって水を流出したりするので、水との関係が深いと読み取れる。「水にかかわるのだが須佐之男命の泣きわめくことは、その水の秩序を滅茶苦茶にしてしまう。膨大なエネルギーを持つ存在であることがそこによく表されている」(『新編日本古典文学全集古事記』解説)とあるように、やはり水にかかわりがあり、そしてすさまじいまでのエネルギーを持つ神であったのだろう。

スサノヲという神を形づくる要素に水ははずせない。水の支配は生死の支配も含む。生気をもたらす湿りを奪えば、すぐに人間と自然は死んでしまう。泣くことで、泣く神としての性質によってスサ

ノヲは湿りを世界から奪い、死を呼びよせる⁽¹⁾。だから追放されてしまう。しかし、追放された場所は、根の国、妣の国であり黄泉でもある。根の国は黄泉との関係もあって死のイメージが強いが、死によつてもたらされるものもある。死体から神が成るといふのが『古事記』には出てくる。三貴子が誕生したのも、死の国から帰ったイザナギがミソギをしたからである。死は再生と表裏一体なのだ。スサノヲは死を呼ぶ水（曇風雨）を支配しつつ、また生氣をもたらず水も支配できる。新たな生が芽を出す「根の国」そして後に出てくるオホゲツヒメ神話でのオホゲツ姫とのかかわりからみても、水や穀物とのかかわりが見えてくる。

第二節 うけひ神話

アマテラスとスサノヲ二神のうけひ神話は、二神の所持している珠と剣から神々を生み、その神々の性別によつて心の清濁を判じようというものであり、子生みのうけひと言える。

この神話の中で最も疑問なのは、アマテラスとスサノヲは近親婚であつたかどうかという問題である。なぜなら物実ものみの交換をするからである。結論からすると、私は近親婚の要素がみてとれると思う。そもそも古代においていつも身に付けているものには、本人の靈力が宿ると考えられていたのだ。だから常に身に付けている物を渡し

あうというのは、重大な意味を持つている。感染呪術的神婚といえるのではないだろうか。アマテラスは三人の女神を生み、スサノヲは五人の男神を生む。この後がポインントだと思ふのだが、それぞれの生んだ神は本人たちの子神となるのでなく、アマテラスは「私の珠により生まれたので男神は私の子。あなたの剣より生まれた女神はあなたの子。」と詔り別きを行うのである。スサノヲの息吹、生命エネルギーを受けた男神達が、アマテラスの子として扱われるのである。ここに婚姻がほのめかされているのではないかと私は考えた。

アマテラスはスサノヲ、出雲系の力を吸収したかったのではないだろうか。実際この時生まれたアマテラスの子神は、皇祖神たるアメノオシホミミという重要な神だ。この子神に感染的とはいへ、スサノヲの力を入れたかつたのではないか。スサノヲの力は『古事記』で散々語られてきて言うまでもないが、泣くだけで山を枯らしたり、河や海を干上がらせてしまうほどである。それほどまでのエネルギーを有している。高天原側としてもその力は魅力的だったのではないだろうか。後にくる国譲りの段、出雲の平定のためにも、国つ神を従わせるために、自らが国つ神の力を取り込んだ、と解釈した。それも相姦という形をとらずに。これは別に古代において性行為をことさらに忌んでいるとか、処女性が尊ばれていた、という意味で

はなく、アマテラスを至高神として絶対性を保ったままにしておきたい、という『古事記』編纂者の意図を感じる。アマテラスが性行為を行えば、アマテラスは肉体的に無傷^②でいられなくなってしまう。これを避けたのだろうと推察できる。

そしてスサノヲはうけひに勝ったと言ひ、勝ちに乗じて田や溝を破壊し、尿をまきちらす。しかし、注意したいのがスサノヲに邪心がなかったという点である。スサノヲの神性は区分に対する未分、コスモスに対するカオスである。善意、悪意といった視点からはとらえられないこの神の神性は、整備された田を元の状態、自然状態に戻すということであった。アマテラスは詔り直しによって暴挙を鎮めていたのだが、「血」と「死」のケガレには勝てず、石屋戸へこもってしまうのだ。

スサノヲ神に高天原(アマテラス)に対する邪心はなかったのだが、「忌服屋」において、ただ一度邪心が働いたのではないだろうか。天の斑馬いばを投げ入れるという行為がそれである。これは禁忌の姉弟婚を連想させる。

なぜ姉弟婚を連想させるかという点、『日本書紀』一書第一では、投げ込まれた斑馬に驚いてアマテラス自身が梭で女陰を突くからである。『古事記』では服織女が梭により死んだことになっている。アマテラスが『日本書紀』ではオホヒルメムチと呼ばれており、ヒ

ルメとは「日る女」、すなわち太陽神につかえる巫女を思わせる。忌服屋で機織をしている服織女は、巫女であるアマテラスの分身ととれなくもない。その服織女が女陰を突いて死ぬ。というのは性交をほのめかしていると読み取れるのだ。

それと同時に異常婚のタブーも発生している。斑馬に驚いて梭で女陰を突いて死んだというの、契った神の正体が蛇だと知って、箸で女陰を突いて死んだという、三輪山の神婚譚と同類である。しかし獣姦の禁止はどこからきているのだろう。その観念は、性交という動物的な行為への怖れや嫌悪を最も強く表現したものが、動物そのものと交わるという空想の像であり、動物婚の禁忌なのである^③。そして、獣姦と姉弟婚という二重のタブーをせまられ、ついにアマテラスは石屋戸にこもってしまう。詔り直しなどでは治まらない、「血」と「死」という最大のタブーが起こってしまったからだ。

第三節 オホケツ姫神話

『古事記』や『日本書紀』における、代表的な作物起源神話(ハイヌウエレ型神話)は、神の生体からの嘔吐排泄によって食物が、また神の死体の各部分からの化生によって作物が発生した形式の神話である。「有用植物の起源を語る伝承に、供犠が重要な役割を果たしていることを示している。その供犠の意味を原存在の死が殺害

によつてなされ、それがこの世界の死と生と生殖をもたらし、生物の秩序を保障するという、ひとつの神話的世界像の認識のための原古の殺害を演じているもの。」とイエンゼンは述べている。⁽⁴⁾

オホゲツヒメ神話は、遊離神話とみなされてきた。しかし、スサノヲの勝さび行為によつて田や機織を妨害したことへの罪滅ぼしと見る考えもある。⁽⁵⁾『古事記』では、スサノヲは祓へをした後追放され、「また、食物を大気都比売神に乞ひき」と続くので、これらを一ひとつの流れの文として読むならば、スサノヲは罪滅ぼしの為に数々の品物と鬚、爪を提出し、そしてやはり罪滅ぼしの為に食物を提出しようとした。と読めるのではないだろうか。ではなぜ食物が必要になったのかというと、勝さび行為に対するものである。

菅田つくだの畔かみを離ち、溝を埋めるといふのは農耕妨害とみなせる。そのあと大管殿に尿を撒き散らしたり、忌服屋に馬を投げ入れたりするのは、大嘗、つまり収穫祭の妨害である。これらの勝さび行為によつてアマテラスは石屋戸にこもつてしまふ。アマテラスの石屋戸ごもりは、葦原中国にまで影響を与えてしまふ。だからその罪滅ぼしのためにも、高天原はスサノヲに食物を要求したのではないだろうか。

ハイヌウエレ型神話では、有用植物がもたらされる時には必ず供儀、生贄というものが出てくる。大いなる存在の劇的な出来事、死

などによつて新しきモノが生まれるという考え方だ。『古事記』ではオホゲツヒメの殺害、『日本書紀』一書の十一ではツクヨミによる保食神うけもちの殺害によつてでてくる。

ここで『古事記』と『日本書紀』一書の十一を比較したい。三貴子のうちの二神が食物の神を殺害しているのだ。どちらも排泄物から食物を出していることに怒り殺してしまふというのも共通している。この時代、死はケガレとされ忌まれてきたわけで、特に高天原アマテラス系の神は死に関わることはタブーであつたと思う。忌服屋の例からもわかるように、機織女の死によつてついにアマテラスは身を隠してしまうのだ。それほどに死を忌避しているわけである。「時に、天照大神、怒りますこと甚だしくして曰く、汝は是悪神なり。相見えじ」という原文からもわかるようにアマテラスのツクヨミへの怒りは凄まじい。しかし、後文でアマテラスは「是の物は頭見つらみ着生まぎ食たいて活なくべきものなり」と言い、喜んでこれらの穀物や蚕をもらつてゐる。

つまり、アマテラス側としても食料が欲しい。それには「死」が避けて通れない。しかし至高神アマテラスはその手を汚してはならない。死・穢れとは遠い所にいなくてはならないのだ。そこに登場するのがスサノヲとツクヨミである。二神は見事に食物神を殺害し、それによつて食物・蚕はもたらされた。『古事記』の方には出てこ

ないが、『日本書紀』ではアマテラスはそのことに喜んでい
る。山田永の「スサノヲはアマテラス側に追放されつつ、しかし
協力している神」という意見におおむね賛成である。今回の食物神
との関わりも、殺害というダークサイドを担ってくれたわけであり、
協力していることになると思う。

葦原中国に食物をもたらすという重要な役目を罪人であるスサ
ノヲに任せるのは不自然であるという意見もあるが、そこには供犠
ということが密接に関わっているのだ。「死」は避けて通れない。
でも、ケガレをもらってはならない。そこで汚れ役とでもいうべき
役目をスサノヲとツクヨミが担ったのではないか。というのが私の
考えだ。

第二章 出雲のスサノヲ

第一節 ヤマトノヲロチ

スサノヲが出雲においてヤマトノヲロチを退治する。この話には
いったいどのような意味があるのだろう。舞台が高天原から葦原中
国へ移り、その中でも出雲において話が展開してゆく。ゆえにヲロ
チの話からオホナムチの話までは出雲神話と呼ばれてきた。

私はこれまでも、スサノヲと根の国との関係に作物の豊穰性を

みたり、海原統治や、泣くことによる水のコントロール、オホゲツ
姫神話における地上に穀物をもたらす役割などから、スサノヲと農
耕の関係の深さを言ってきた。この出雲神話でも、農耕との関係が
読み取れる。それはクシナダヒメである。『古事記』では櫛名田比
売と書き『日本書紀』では奇稻田姫と書き、双方に田の文字が使わ
れていることから、農耕とのかかわりがわかる。そのような田と
関係のある姫を蛇が毎年取りに来るというのも、年々に行う儀礼に
基づいた話であったということだろう。それに、話の舞台が「肥の
河上」であり、水が稲田に最も必要なものだとすると、蛇は地の精
霊というよりは、水の精霊としての意味あいが強い。古代において
蛇は水神として扱われていたのは、様々な文献からもわかっている
ことである。また、ヤマトノヲロチの身に桧や杉の木が生えており、
その身長は八谷八丘にもわたっていたというのは、蛇の大きさを物
語っていると同時に、山自体がヲロチを象徴していたのかもしれない。
その山から肥の河が流れていたわけで、その山の神であるヲロ
チは、河の水によつて恩恵を与える一方で、洪水などの被害を与え
る存在でもある。洪水による稲田の流出は、農民たちにとっては死
活問題である。クシナダヒメは稲田の人格化である。稲が洪水で失
われないうちに、毎年時を定めて水の神に処女を捧げて穀物の豊穰
を祈ったという宗教的儀礼がそこらみてとれる。

そして、スサノヲのヲロチ退治神話において、重要なことはクシナダヒメとの婚姻である。『古事記』において「国つ神」の初出が、「僕は、国つ神、大山津見の子ぞ」というアシナヅチの台詞からなのである。『古事記』の中のスサノヲは天つ神でも、国つ神でもないのだが、天つ神の至高神アマテラスの弟である。そのような天つ神の性質を持った神が、国つ神の娘であるクシナダヒメと婚姻する。この神話における重要なポイントはやはりここであろう。婚姻によってクシナダヒメ・出雲の国つ神の持つ豊穰性を手に入れ、なおかつ婚姻による血縁的な組み込みも行っているのだ。ここに、アマテラスの弟でありながら、国つ神の性質も持ち、オホクニヌシの祖先となつてゆくスサノヲの位置が確立されたといつても良いだろう。

第二節 草なぎの大刀

スサノヲはヤマタノヲロチを退治する。そしてそのヲロチの尾を切った時に草なぎの大刀が出現する。そしてスサノヲは大刀を「異しき物」と思つてアマテラスに献上する。次に草なぎの大刀が出てくるのは、ニニギの降臨の時である。

是に、其のをきし八尺の勾カサ、鏡と草那芸クサノヒメ剣と、亦、常世思金神・手力男神・天石門別神を副へ賜ひて、詔ひしく、「此の鏡は、専ら我が御魂と為て、吾が前を拜むが如く、いつき奉れ」

(記・上・天孫降臨)

これが世に言う三種の神器の事であるが、『古事記』には「三種の神器」あるいは「三種の宝物」(神代紀第九段一書第一)といった表現はされていない。三種の神器という言葉は後の世の天皇家により定着したもので、『古事記』では重要視していないのだ。しかし、草薙の大刀自体は天孫降臨の際、そしてヤマトタケルの話にも登場して、そこでかなりの力を発揮するのである。

ヤマトタケルは父に命じられ、東征へ出る際に、伊勢神宮へ参拝しヤマトヒメに会い、ヒメから草なぎの大刀を授かるのである。相模で野に火をつけられた時、ヤマトタケルは草薙の大刀で草を刈り払い、火打ち石で向火を付けて難を逃れるのである。そして、尾張においてミヤズヒメと結婚し、ミヤズヒメのもとに草薙の大刀を置いて伊服岐山の神を素手で討ち取るうとするのだが、敗北してしまふ。ヤマトタケルの敗北は、草薙の大刀を手離した事が大きい。と『古事記』は言いたいのだ。なぜなら、草薙の大刀はアマテラスからニニギにわたり、ヤマトヒメの手を経てヤマトタケルに渡つたからである。ヤマトタケルが伊勢大御神の宮へ参つたというのも、つまりアマテラスを参拝したことに他ならない。そして東征に出たのだから、アマテラスの加護のもとに出かけたのを意味する。伊服岐山の話は、その加護から離れてしまったため敗北、そして死に至つ

てしまったことを示しているのである。それだけアマテラスの加護が強かったことを強調したいのだ。

それにしてもスサノヲが大刀を献上したのはなぜか。高天原での行いの罪滅ぼしの意味あいが強いのではないかと思う。もちろん大刀の献上は服従を示しているのであるが、なぜ服従しているのかといえばやはり思い出されるのが「忌服屋」での出来事である。アマテラスに禁忌とされている近親婚と異類婚をせまったせいだ。アマテラスは天石屋戸にこもってしまったからである。それによって引き起こされた事態は高天原および葦原中国までもを暗闇にし、あらゆるわざわいが起こったというものであった。この罪のつぐないのために、スサノヲは大刀を献上する。ヲロチは出雲の渾沌こんたんを示しており、そのヲロチを退治することは渾沌を秩序に持つていったということだ。大刀献上は、秩序立った出雲を高天原の秩序の中に組み入れてしまうこと、高天原への帰属である。このことが、高天原から追放されたスサノヲが出雲でしなければならなかった大きな任務であったのだ。

大刀献上が、罪滅ぼしと、服属を表しているとして、でも実際に草なぎの大刀が機能しているのは、ヤマトタケルの手に渡ってからである。天孫降臨の時は、「此の鏡は、専ら我が御魂と為て、吾が前を拝むが如く、いつき奉れ」とアマテラスが述べているところか

らもわかる様に、あくまで鏡が主である。鏡が主であるなら、草なぎの大刀の意義とは何かというと、つまり武力である。猛々しい力である。私は、スサノヲがヲロチから手に入れたのだから、いくらアマテラス、ニニギ、ヤマト姫を経てヤマトタケルに渡されたとしても、スサノヲの荒々しい力が宿っている大刀だと思う。その大刀を以ってしてヤマトタケルは次々に武勲を建ててゆくわけである。そして葦原中国を武力で平定してゆくのだ。しかし、ヤマトタケルはスサノヲと同様に英雄性を色濃く持つ者であるから、秩序立った世界を作りつつも、その秩序立った世界からは追いやられるのである。それは、一章でも述べたように、高天原側は、血やケガレを忌んでいるからである。自分たちの手を血で汚すことはしないのである。だからヤマトタケルの話でも、殺害などを含む汚れ仕事は、すべてヤマトタケルまかせなのである。

また、ヤマトタケルを次々に勝たせていった草薙の大刀は、高天原製ではない。という所に注目したい。国つ神（出雲）側のものだったのである。それを献上させ、使用してゆくというのは、まさに負を倒すために負の力を取り込む、という図式にあてはまる。負というのはもちろん高天原側にとつての負である。この図式は、一章二節で述べた「うけひ神話」でもみることができる。アマテラスは、やがて来る葦原中国平定のためにも、スサノヲ（負）の力が欲

しかったのである。だから感染呪術的な形をとって子神を成らせたのだ。このうけひ神話と草なぎの大刀の話には、スサノヲのすさまじい力を嫌悪しつつも手に入れたいとする、高天原側の矛盾する気持が読み取れる。

出雲から得られたものにより、出雲・葦原中国が平定されてゆく、という皮肉な結果がここにあらわれている。

第三章 スサノヲとオホクニヌシ

スサノヲに祝福の言葉をもらい、オホアナムズはオホクニヌシとなる。大刀や姫、それに祝福の言葉の獲得により、スサノヲの後継者とも言うべき存在となったオホクニヌシについて本章では論じてゆく。

生大刀・生弓矢でもってオホクニヌシは、あれだけでこずつた八十神を簡単に追いやってしまう。ここにスサノヲの大きな力を受け継いだ事が良く表されている。

また、スセリビメを嫡妻にせよ、との言葉も重要になってゆくのだ。支配者というものは、その土地の姫を娶る事により、血縁的組み込みでもってその土地を治めてゆく。しかし、オホクニヌシの婚姻は、スセリビメによってことごとく邪魔されてゆく。『古事記』では嫉妬という形でもって書かれているが、結果的には出雲系の神

に子孫を残させないように話を展開させている。このスサノヲの祝福の言葉には、巧みなオホクニヌシへの規制が盛り込まれていることがわかる。系譜においてはオホクニヌシは子を残しているのだが、いつのまにか消えていつている。子孫が続いてゆかない。敗れゆく出雲側だからである。

オホクニヌシはスサノヲの保証（祝福の言葉）のもとに国作りをはじめ。しかし、スサノヲの保証のもとに作っていると、も、正統なものとはいえない。なぜなら国作りのための生大刀・生弓矢はアマテラスが持っていた物ではないからである。だからアマテラス側にとつては国作りは不当なものであり、だからこそ後に「国譲り」を要求してきたのである。

スサノヲは始めにヲロチを退治し、出雲の平定を行う。しかしこれは地ならし的なものであった。後に子孫であるオホクニヌシの葦原中国（出雲）平定。カムムスヒの助力もあり、ここにきてついに葦原中国を治めたわけだ。そこで、それまでの困難な汚れ仕事はスサノヲ・オホクニヌシにやらせ、できあががた国は譲ってもらおうというのが、高天原側の考えである。満を持しての降臨である。至高神アマテラス、およびその子孫は決してその手を汚してはならない。それにスサノヲには勝ちさび行為の時に行った罪がある。そのつぐないのためにも、出雲を平定しなければならなかった。スサノ

ヲは出雲を平定し、その国つ神の娘を娶つて、国つ神の力を吸収した。ということなのだが、やはりこの出雲神話からは、出雲の高天原に対する服従を書いている、という裏の意味も見える。そして数々の試練を乗り越え、スサノヲの娘スセリビメを娶り、生大刀・生弓矢をもらい、スサノヲの強大な力を継承した子孫であるオホクニヌシもまた、スサノヲに引き続きアマテラス側へと働いているのである。

おわりに

私は、これまで高天原側は清浄性を保つたために、汚れ仕事は国つ神や出雲系の神に任せてきた。と繰り返し述べてきた。世界を統治してゆくのに聖性だけではやってゆけないのもまた事実である。例えば武力による平定。殺害を伴う供儀。なにかもが光に満ちているというわけにはいかないのだ。だから、負の要素である(高天原にとつて)スサノヲおよびその子孫であつても完全には手離せなかつたのだ。汚れ仕事の担当は彼らに任せられていったのである。さらに、負の力を抑えるために、負の要素を自らが取りこむといった記述もみられた。アマテラスとスサノヲによる感染呪術的な子神の成らせかたや、アマテラスの子神側に「出雲国造」の祖がいると、というのが示しているように、出雲の力を取りこんでいる。神武天皇

の妻である「ホトタタライススキヒメ」の父はオホモノヌシである。ここでも天皇の系譜にオホモノヌシ(オホクニヌシ)が関わっている。そして、出雲から手に入れた草薙の大刀による、ヤマトタケルの葦原中国の平定、と、たびたび出雲の力を吸収し、利用しているのだ。吸収していたということは、それだけ大きな力を持つていたことを示しているのだし、また、怖れていたからこそ、出雲大社・大神神社を祭っていたのだろう。

註 (1) ネリー・ナウマン(松枝陽一郎・田尻貞理子訳)『哭きいさちる神

スサノヲ』一九八九年 言叢社

(2) 山田永『古事記スサノヲの研究』二〇〇一年 新泉社

(3) 森朝男『恋と禁忌の古代文芸史』二〇〇二年 若草書房

(4) 吉田敦彦『小き子とハイヌウエ』一九七六年 みすず書房

(5) 2に同じ

(6) 2に同じ

(7) 倉野憲司『古事記全註釈』第三巻 一九七六年 三省堂

(8) 2に同じ

(二〇〇三年 卒業)